

Peter Garnsey, *Idea of Slavery from Aristotle to Augustine*, Cambridge, 1996.

Pp. xv+269. ISBN0-521-57403-x (bound);

0-521-57433-1 (paper)

鶴 町 八 重

著者Peter Garnseyは、現ケンブリッジ大学の古典古代史の教授であり、古代ローマの社会、経済、文化、法、宗教、思想と幅広い分野で優れた業績を残している。⁽¹⁾特に最近では、初期キリスト教の政治的側面がローマ社会の権力とどう関わっていたのかについて考察している。

本書は、一九九五年、ダブリンのトリニティー大学で行なわれた古代奴隸制についての講義録からの抜粋である。

本書の特徴としては、まず第一に、古代奴隸制をめぐる

「観念」に議論の焦点が当てられている点が挙げられる。近年の古代奴隸制研究は、奴隸の職業や、奴隸の解放手続きといった目に見える部分での奴隸制の実態を考察するものが多かった。たとえば、古いところではM. I. Finleyの *Slavery in Classical Antiquity* (Cambridge, 1968) が、最近ではK. Bradleyの *Slaves and Masters in the Roman Empire*, (Brussel, 1986)

などが挙げられる。しかし、本書は古典古代の思想家たちが奴隸制をどのようなものと捉えていたのか、という意識や観念に重点を置いたところに特徴がある。

第二に、大学での講義録からの抜粋だけあって、聴講する学生たちに分かりやすいように、議論を進める上で鍵となる史料の的確な英訳を提示している点が挙げられる。著者は、それぞれの史料の意味と傾向を詳細に調べ上げていて、その結果、議論に説得力が出ている。

本書は大きく分けて二部構成になっている。

第一部は、「奴隸制への態度」と題して、古典古代の思想家たちが奴隸という存在をどのように定義していたのかを抑えた上で、奴隸制への批判または正当化、奴隸制の緩和についての言説を提示し、それに解釈を与えている。

第二部では、「思想家たちの奴隸制理論」として、思想家

たちを年代ごとに三つに分けて採り上げている。すなわち、「古典古代の哲学者たち」としてアリストテレスとストア哲学者たちの言説を、「初期キリスト教神学者たち」としてフィロンとパウロの言説を、「教父たち」としてアンブロシウスとアウグスティヌスの言説を採り上げている。そして第二部の最後では、教父たちが、神とキリスト教徒の関係を明らかにするための比喻として使用した奴隷制についての言説をまとめている。

以上が本書の特徴および構成であるが、以下順を追ってその内容を簡単に紹介していこうと思う。

第一部「奴隷制への態度」

はじめに著者は「受け入れられた奴隷制」と題して、古代思想家たちが奴隷をどう定義したのか、考察している。プラトンは奴隷を「財産」つまり「物」として扱い、一方アリストテレスは奴隷を自由人とは区別するが「人」として扱った。また、二世紀の法学者ガイウスはその著書『法学提要』の中で「奴隷は主人の権力下に置かれ、そのことは万民法に基づくと述べ、奴隷を「物」として扱った。一世紀の旧約聖書の注釈者フィロンは聖書を引用して、奴隷をユダヤ人と非ユダヤ人とに区別し、前者は契約期間のみ主人に仕える「人」であり、後者は一生主人の「物（＝財産）」であるとした。これに対して、パウロやその他のキリスト教伝道者たちは、ユダヤ人と非ユダヤ人という境界線を取り払い、全ての人間

は、人の奴隷ではなく、神の奴隷であると説いた。つまり、実際に「奴隷」身分にある者も「人」とみなしたが、しかし、主人に仕えるという奴隷としての役割は神によって与えられた役割であるから、続けて果たすよう説いた。こうしたパウロの考え方、すなわち奴隷を「人」とみなすが奴隷としての役割は続く、つまり自由人とは区別する考え方は前述のアリストテレスの考え方に通じるものがある。

次に「奴隷制の正当化」として、奴隷制の有用性を評価する古代の言説を集めている。アリストテレスは『政治学』の中で奴隷に適した人、すなわち「自然奴隷」の存在を主張する。自然奴隷とは、理性を欠き、自立性を持って生活することが不可能な人たちであり、彼らは主人に仕えることで自らの安全を確保した。アリストテレスの自然奴隷という考え方は、フィロン、オリゲネス、バシレイウス、アンブロシウスに引き継がれる。彼らは旧約聖書に描かれたエサウとカナン人の奴隷化のエピソードを自然奴隷の事例と解釈した。またフロレンティウスのような法学者たちは、戦争捕虜奴隷に関して言えば、彼らが死をまぬがれている点で奴隷制は奴隷にとっても有益であるとする。アンテيوخシアの雄弁家リバニオスとキュロスの司教テオドレトスは、奴隷は食事の心配がない分主人よりも安穩と暮らすことができたと論じている。このように著者は、奴隷制は主人だけでなく奴隷にとっても有用であったという史料を集めている。

一方奴隷制を批判する言説について、著者は「奴隷の身体

的な扱いに対する批判」と「奴隷制度そのものへの批判」に分けて論じている。

前者の批判に関して、ディオドロスは第一次シチリア反乱を起こした奴隷に対し、またセネカは家内奴隷に焦点を当てて、奴隷たちに情熱的な思いやりを向けている。両者はともに主人が奴隷を残酷に扱っていたことを暗に指摘し、その行為を批判しているが、しかし、奴隷制そのものの廃止を議論するまでには至らなかった。

これに対して、奴隷制度そのものの批判は、前五〜前四世紀にかけてのソフィストたちの運動に始まるとされているが、史料が乏しいためにその内容は未詳である。少し時代が経つて、アリストテレスは戦争捕虜などによる奴隷を「自然奴隷」に反するものとして批判した。戦争捕虜には本質的には自由人である有徳の者も含まれてしまうからである。このようにアリストテレスは奴隷制そのものの批判にはいたらないが、戦争捕虜に基づく奴隷制を批判した点で、奴隷制批判を一步進めたとはいえるかもしれない。

またラクタンティウスは、社会的立場の相違（主人か奴隷か、王か市民か、裕福か貧しいか、権力があるかないか）を超えた精神面での人々の平等性を説いた。ストア学派の哲学者たちも精神面、あるいは魂の面では主人と奴隷は平等であると論じた。しかし、両者とも精神面での平等性から、実際に存在する奴隷制を批判する議論には至らなかった。精神面での平等性から奴隷制そのものへの批判を主張したのは

ニュッサのグレゴリオスである。しかしグレゴリオスの奴隷制廃止論は他の人々に広まっていかなかった。

第一部の最後に「緩和化された奴隷制」と題して、ギリシアとローマの奴隷制を比較し、奴隷はローマ時代になって寛大に扱われるようになった点を指摘している。ストア学派の哲学者たちは奴隷を人として扱うことを説き、初期キリスト教共同体は四〜五世紀に奴隷の扱い方を改善するよう説いている。また、ローマ法学者も法の力で奴隷の境遇を改善しようとした。アントニヌス・ピウス帝のとき、冷酷な主人から逃れるための奴隷の避難所が合法化された。また奴隷解放に関して、ギリシアよりローマの方が多く行なわれ、キリスト教会内でも奴隷解放は奨励されていたようだ。しかし実際には、奴隷は主人の権力下に置かれたので、法よりも主人の性格よって境遇が左右されることが多かった。また教会において奴隷解放が奨励されたのは、キリスト教徒は貧しく生きることを善いとする教義を持っていたために、奴隷たちを「財産（＝物）」として捨てたに過ぎなかった。このため、教会は奴隷を解放することよりも、主人と奴隷の関係改善に力点を置いていた。キリスト教もまた奴隷制の廃止を唱えてはいないのである。

第二部「思想家たちの奴隷制論」

第二部では古代の思想家たちを、時代によって三つに区分して取り上げている。すなわち、古典古代の思想家としてア

リストテレスとストア学派の哲学者たちを、初期キリスト教神学者としてフィロンとパウロを、教父としてアンブロシウスとアウグスティヌスを取り上げている。

まず著者は、アリストテレスの自然奴隷説について、次のようにまとめる。アリストテレスは自然奴隷を、それと類似するもの、つまり、動物、女・子供との比較から、自然奴隷の本質は動物以上人間未満の存在としている。

またアリストテレスは、主人・奴隷関係を様々なものにとえて表現している。まず主人・奴隷関係に見られる支配・被支配の関係を魂・肉体関係にたとえ、奉仕される者と奉仕する者の関係として職人・道具関係にたとえている。『ニコマコス倫理学』の中では、主人・奴隷関係を僭主政にたとえて表現している。しかし興味深いことに『政治学』の中では主人・奴隷関係は僭主制とは類似していない、と意見を変えている。この点について著者は『倫理学』から『政治学』への執筆過程で、自然奴隷制説に発展があったからであろうと推測している。つまり、戦争捕虜によって自由人でも奴隷になる可能性があることを認めたとき、アリストテレスは考え方を変えざるを得なかったのである。しかし彼は、「自然主人」という存在をあくまでも想定していたために、自然奴隷制説を變形させながらも維持した。即ち、アリストテレスが自然奴隷説に固執したのは、主人が奴隷を所有する権利を守るためであった、と言える。

次に、著者はストア学派の言説を集めている。ストア学派

は初・中・後期に分けられるが、特に初・中期がストア学派の中心意見であると著者は主張している。その史料は、後の著作家たちが引用した断片しか残っていないのであるが、そこから分かることは以下の点である。

第一にストア学派は、「人には果たすべき役割が与えられている」と考え、奴隷には主人に仕えるという役割が与えられていると考えていた点である。

第二に、ストア学派は「全ての人間には理性と徳がある」という考えを持っていたことが分かる。これはアリストテレスの自然奴隷説とは相反する意見である。ストア学派は、肉体的には奴隷である者も魂の面では徳を持つ自由人であるとしたのである。

ここからストア学派の議論の中心は徳に関わる魂の面に向いていった。そして、「魂は与えられた役割を快く果たすことでより自由になる」という考え方に至った。

次に著者は、前述の哲学者たちとキリスト教神学者たちの奴隷制への見解との橋渡しをした人物として、フィロンを取り上げる。彼は『全ての善人は自由である』という一書を著し、「肉体の奴隷」と「魂の奴隷」という考え方を示した。前者は戦争捕虜か競売または出生による奴隷であり、この場合、奴隷は主人より財産が劣っているに過ぎない。一方、魂の奴隷というのは、理性を欠いた劣者であり、賢者に支配される必要がある存在であった。つまり、肉体の奴隷とは前述したストア学派の役割としての奴隷という考え方に、魂の奴

隷とはアリストテレスの自然奴隷の考え方に影響を受けていると言える。

さらに、魂の奴隷というのは神によって定められているとして、旧約聖書に描かれるエサウとカナンの奴隷化のエピソードを神によって定められた魂の奴隷という考え方に即して解釈している。このように、フィロンは古典古代の思想家たちの奴隷制論を聖書解釈の中に取り入れているのである。

フィロンと比較される思想家としては、パウロが挙げられている。パウロはユダヤ教経典、古典ギリシア哲学、ストア哲学の考え方と、パウロ自身の社会経験や思想とを結びつけた独自の奴隷制論を展開させた。パウロの独自の考え方とは「神の下での人類の平等」という思想と、「人の運命は全て神の意思によるものであるから、人は自分の運命を受け入れるべきである」という一見矛盾して見える思想である。

この考えの下、パウロは奴隷に対し主人に従順に仕えることを説き、一方で主人に対しても奴隷を寛大に扱うことを説いた。また、エサウの奴隷化のエピソードをローマ書九で取り上げ、エサウの能力をフィロンのようにおとしめるのではなく、神に与えられた運命として受け入れるべきことを説く。また法による奴隷制も神の意思によるものであるとして、同様に受け入れるべきことを説いた。

またパウロは、奴隷と自由人の関係を他の区別（性、民族、文化、法）のうちの一つにすぎないとして、重要視していない。パウロは奴隷と自由人の関係を区別するより、むしろ父

子関係にたとえてその類似点を強調する。奴隷と息子との相違は相続権があるか否かであり、主人や父の支配の下に置かれる点では同等であると説いた。ここから著者は、パウロはキリスト教とローマ社会が共存できるよう現実的な説教を説いたのではないかと推測している。

四世紀にミラノ司教だったアンブロシウスは、古典期ギリシアから引き継がれ、その主張において相対立するアリストテレスの自然奴隷説とストア学派の役割としての奴隷についての論を融合し、キリスト教的に解釈することを試みた。アンブロシウスは奴隷制の根底にあるのは愚かさと不正であるとし、とりわけ愚かさ注目する。彼の言う愚かさとは、精神と道徳心の永遠の欠乏を指し、これはアリストテレスの自然奴隷説の影響を受けていると言えよう。さらに、徳はキリスト教徒の徳で補う必要があると説き、キリスト教の優位を説いた。

一方アンブロシウスは、奴隷制は人の法によって定められているものではなく、神の法によって定められているものだから、運命として受け入れるべきであると説く。これは、奴隷としての役割を奴隷身分の者たちは果たすべきであるとするストア学派の説の影響を強く受けている。

このようにアンブロシウスは古典期ギリシアから引き継がれている哲学者たちの諸説を融合し、キリスト教の教義に取り入れようと試みた。そして、それをさらに発展させ、体系化させたのがアウグスティヌスである。

彼は奴隷制の実状に関心を持ち、実際の主人・奴隷関係の構造に着目する。初めに彼は、奴隷所有は人間の財産所有の権利であるということを前提にする。その上で主人は奴隷を支配せねばならず、奴隷は主人に奉仕する立場を受け入れねばならないことを説く。これは家庭内の平和を維持し、都市の平和をもたらすためである、としている。家庭と都市の關係に対する考え方は、奴隷を主人の一部とみなすアリストテレスの「部分と全体」の關係に対する考え方を利用している。アウグスティヌスはまた、悪い主人のモデルとして皇帝ユリアヌスを挙げている。そして悪い主人、即ち皇帝の支配は一時的なもので、神という本来の主人が永遠の支配をするであろうと説く。

さらにアウグスティヌスは、ペテロとパウロ以来議論されてきた、奴隷の中には生まれながらに奴隷の者と自由人でありながら奴隷とされた者がいる、という説に触れ、後者に関しては身代金を払ってでも自由人として買い戻すべきであると説く。これは戦争捕虜となった帝国内の自由人が蛮族の奴隷になることを防ぐためである。ただし反対に、蛮族が帝国内で奴隷になることは認めていた。従ってアウグスティヌスの関心は帝国内の自由人にのみ向けられたものであり、帝国外の蛮族には関心がなかったと言える。

一方、アウグスティヌスは奴隷制の起源にも目を向けていて、奴隷の主な要素は罪であると主張する。たとえば旧約聖書のエサウの奴隷化のエピソードを、フィロンが考えている

ように「利益があるもの」とは解釈せず、パウロ同様、エサウは罪人であり、奴隷となることが生まれたときから運命であったと解釈する。これはアダムの原罪を根拠としている。故に、墮落する以前罪は存在せず、奴隷制は罪によってできたものであるとする。そしてこの主張は全ての奴隷制と全ての罪を包括する、とアウグスティヌスは考えた。つまり旧約聖書の奴隷化のエピソードだけでなく、戦争捕虜による奴隷化も罪によるものであると説いた。

ところで、パウロにせよラクタンティウスにせよ、キリスト教著作家たちは神とキリスト教徒の曖昧な關係を明白にするために、しばしばそれを主人・奴隷關係または父・息子關係にたとえた。著者は最後に「隠喩としての奴隷制」と題して、奴隷と息子の地位の類似点を言及した著作家たちの言説を集め、教父たちにとつての奴隷制のイメージを明らかにしようとしている。

ラクタンティウスは著書『神の摂理』と『神の怒りについて』の中で、主人の奴隷に対する、あるいは父の息子に対する支配・被支配の側面を強調する。そして、主人や父親と同様、神は怒りを示す存在であることを説く。アウグスティヌスはラクタンティウスの説に加えて、奴隷と息子は共に罪人であり、罰を受けるべき点で似たような存在であるとした。しかし、奴隷は恐れによって主人に仕えるが、息子は愛情によって父と結ばれているという点でその地位は区別されると述べている。

また、アレクサンドリア出身のオリゲネスは、養子縁組による父・息子と血のつながった父・息子とを区別して取り上げている。さらに司教アタナシオスはこの説を強調し、神とキリストは血のつながった親子であり、一方神と人間は養子縁組の親子であると表現した。かくして彼はキリスト教徒を神の息子と呼ぶようになり、神の奴隷と呼ぶことをやめた。

このようにキリスト教徒を奴隷ではなく息子にたとえるようになって、教会内では奴隷と息子の区別が消えていった。しかし、実社会においては奴隷と息子は罰と報酬の面から区別されており、キリスト教世界とローマ社会は殆ど関わっていないかったと言える。

本書の結論として、著者は以下の二点を指摘している。

第一に、古代において奴隷制は、アメリカ南部に見られたような奴隷制の廃止そのものを求める議論には至らなかった点を指摘する。たとえばアリストテレスは、奴隷制は主人・奴隷双方にとって有効で、より良い生活に到達するためには必要な制度であると説き、むしろ奴隷制を擁護している。一方、セネカは主人が奴隷を冷酷に扱うことは批判したが、同時に主人に奴隷を寛大に扱うことを奨めており、これも奴隷制廃止論には至っていない。こうした古代の思想家たちの系譜に照らしてみても、古代において奴隷制それ自体を罪であるとしなしたニュッサのグレゴリオスの見解は特異である。奴隷所有を当然のこととみなす古代世界においてグレゴリオス

は奴隷を所有すること自体を批判した。著者はグレゴリオスのことを論文の中で「英雄」と表現している。

第二に、古典古代の哲学者とキリスト教徒の奴隷制論の関わりについて、著者は以下のようにまとめている。

キリスト教成立初期、フィロンは「全ての善い人間は自由である」という説を主張した。これはアリストテレスの自然奴隷説を引き継いだものであり、またキリスト教徒にも引き継がれていった考えである。つまり、キリスト教成立以前から、精神面、徳の面において劣ったものが奴隷であるという考え方は存在していた。しかし現実には、徳のある自由人も戦争捕虜などによって奴隷になる場合があり、徳の有無と現実社会での奴隷は一致していなかった。

さらに現実社会での奴隷に対して、キリスト教著作家たちと古典古代の哲学者たちの意見は異なっている、と著者は捉えている。というのは古典古代の哲学者たちは、家を構成する基本要素として、あるいは社会や経済を支える制度として奴隷制を議論していたのに対し、キリスト教著作家たちはそうした家や社会経済の側面ではなく、精神面、宗教面に目を向けてキリスト教徒のみを対象に奴隷制議論をしているためである。著者はこのように二点にまとめているのである。

最後に、本書の議論に対して評者が思いついた点をいくつか指摘してみたい。

本書で最大の収穫は、ユダヤ教徒とキリスト教徒が奴隷制

を議論する際に、以前あったアリストテレスやストア学派といった異教徒の奴隷制論の影響を受けていることを指摘した点である。前述したように、「生まれたときから劣った者と優れた者がいて、劣った者は奴隷である」という「自然奴隷」の考え方はアリストテレスに端を発しているが、のちのユダヤ教徒やキリスト教徒たちも、旧約聖書に描かれるエサウの奴隷化のエピソードをこの考えに沿って解釈している。さらにユダヤ教徒とキリスト教徒は異教徒の奴隷制概念を「神の奴隷」と「罪の奴隷」という考え方に発展させ、信徒を異教徒より優れた「神の奴隷」、異教徒を「罪の奴隷」と呼んで、異教徒の言説を自己の優位性の確立に利用した点をも著者は鋭く指摘している。

ただしここで注意すべきは、著者がユダヤ教徒とキリスト教徒を区別せずに取り扱っている点である。というのも、「神の奴隷」という言葉はキリスト教徒の墓には記されているが、ユダヤ教徒の墓には見当たらないという事実があり、ユダヤ教徒とキリスト教徒を同列に扱ってよいものか、疑問が残るからである。

次に、著者からのコメントはないが、本書から明らかになる点は、古代の著作家たちの間で議論されている奴隷制論とというのは奴隷も主人も常に男である点である。主人と奴隷の関係は、男性の神と人(男)の関係または父と息子の関係にたとえることで常に議論されていて、たとえば父と娘の関係や母と息子の関係のようなものにたとえられることはない。

しかし実際には女主人に仕える奴隷も存在していたはずであるが、著者によって集められた著作家たちの言説は、いずれも男性性に限定されているのである。著作家たちの多くが、奴隷の乳母によって育てられただろうし、また何千人もの奴隷を所有する女性の知り合いもいたはずなのに、である。ここに古代におけるジェンダーの問題が潜んでいるように思う。最後に、本書では結論部分でニュッサのグレゴリオスが取り扱われ、彼の役割が全面的に押し出されている。グレゴリオスがなぜ、他の神学者たちから孤立するような意見、すなわち、奴隷制そのものの廃止を議論する意見を持つに至ったのかという問題は興味深いテーマである。

註

(1) 近年のガンジーの著作は以下の通り。

- ・ *Roman Empire: Economy, Society and Culture*, London, 1987
- ・ *Famine and Food Supply in the Graeco-Roman World: Responses to Risk and Crisis*, Cambridge, 1988, (松本宣郎・阪本浩訳『古代ギリシア、ローマの飢饉と食糧供給』、白水社、1998)
- ・ *Cities, Peasants and Food in Classical Antiquity*, Cambridge, 1998
- ・ *Food and Society in Classical Antiquity*, Cambridge, 1999
- ・ *Evolution of the Late Antique World*, Cambridge, 2000